

落下

有森信二



握り締めたのは、目の前にある出刃包丁だった。「貴様、表に出ろ」

達也の目は据わっている。声は低い。顎を小さく構ったQ大生の連中は、にわかには事態が緊迫したのに驚いたのか、七、八人の群は黙ってしまった。二人ばかりは、店の奥のテーブルに逃げ出した。今まで、達也に向かって声高に罵っていた天然パーマの柿沢と名乗る男は、同じQ大生らしい女の肩に寄り掛かり、唇を震わせ黙ったままである。男の名前が経済学部の子だというのは、今日の昼間、達也が座る隣の学生担当係窓口に来て、「なぜ授業料を払わねばならないのか」と声高に、担当者、担当係長に食って掛かったのを見ていたのだった。

「あんなたちは何も理解していない。われわれは将来、難しい岐路にあるこの国を背負って立つために選ばれ、必要な学問をしろという役割を担わされている。そこに授業料を負担せよ、とは筋が通らない」という奇妙な理屈をフロアの全部に響くほどの声で喚き、授業料の督促状であるらしい書類を叩き付けた。

担当の係長は平静を装っていたが、彼の後ろに組んだ拳が小刻みに震え、説明に務めているものの、「あんなにかじや話にならないから、学長に伝える」という捨て台詞を残し、柿沢が出て行ったのを知っている。

「大口叩きの貴様だ、出ろ」

達也は相手の目を真っ直ぐに見て、もう一度顎を構った。相手は達也の目と、手にした出刃包丁に交互に視線を走らせ、明らかに怯えの色を見せている。

「怖いのか。今までの勢いはどこに行った」

達也はこれまで刃物を手にしたことはないのです、これは自分のやり口ではないと思いつつも悪くはないなと思った。胸先を少し抉くつてやつても悪くはないなと思った。

男は震えている。一メートルほどの距離しかないのです、このままぶつかれば、たちまち血飛沫が上がるだろう。

「出る勇氣もないのか。今までの言いぐさはどうした」

一歩、二歩間を詰める。相手は下がる。女の後ろに回り、椅子から転げ落ちそうになる。何も言わず、奥の方に身をずらすと顎を上げる。一応手を体の前で交差させ、唇を戦慄かせている。

「こいつが怖いのか」

達也は出刃包丁を調理場に投げ、出口への道を開けた。

「外に出ろ。素手でいい」

男は出刃包丁が達也の手を離れたのを機と見たのか、間髪を入れず拳を突き出して来た。達也は避けなかった。男の拳が顔を打ち、口の中に酸いものが湧き出した。「ちようどよい」

達也は正確な短いパンチを返した。一撃で顔の真中に命中したらしく、男は鼻血で染まった顔を傍のテーブルに打ち付け、へたり込んでしまった。

「外に出ろと言ってるのが聞こえんのか」

強めのパンチをあつと五発も見舞ったら、男は死ぬかもしれないと思った。殺しても構わない、という気がしないでもなかったが、こんな男のために警察沙汰になるのも面倒だ、という気もした。

倒れた男を、女と、傍の二、三人が抱え起こし、奥の席の方に急いで運んで行った。

「くそ野郎。田舎者めが、覚えていろ」

運ばれながら、男がやつと声を発した。先ほどまでの高飛車な物言いはどこに行ったのかといわんばかりの、か細い声である。

この発端は、何のこともない些細なことである。

達也と高田と加藤の三人と、三人の共通の友人祥子が、Q大学生街の居酒屋で、加藤の誕生日のためにジョッキを傾けていた。二十一歳になる。みんなは同級生だ。

三人は国立大学Q大に勤務する傍ら、私立F大の夜間部に通う学生でもある。祥子もQ大の職員であり、最近加藤と一緒に暮らし始めた。

そこに七、八人の、酔いのかかなり回ったQ大の学生たちが入って来た。甲高い声を発する天然パーマの背の高い男柿沢と、髪の毛の長い女は体を寄せ合っていた。皆はかなり出来上がっていると見え、「うちの職員の馬鹿臭えこといったら、アホちゃやうか。だいたいな、俺らは国のために選ばれて勉強してやってるのにさ。奴ら、頭悪いというか、てめえの役割が何なのか、考えたこともないらしい。つまり、カラッポだな。そいつらのために税金がよ、給与として使われてるちゆうに、でけえ面しやがってよ。その伝で言えば、俺らこそ金払ってまで下手な授業聞いてやってるんだ。筋が通らん。少なくとも、奴らの給料分ぐらいいは俺らだつて受け取る権利がある。俺たちこそ、国の将来のために働かされているんだ。それがだ、反対に授業料を払えとくる。おかしくないかい」昼間の主張を繰り返す。

目は酔いのために血走り、横の女の肩に手を回し、「反対側の男に相槌を求める。

「俺たちは働いているという訳か。そう考えられんこともないが、そうなると、国に忠義を尽くさんならん」

「防大とか、保安大とかとどう違うんや。法的なことはよ分分かるが、高校で同じクラスやった奴は給与が支給さ

れ、公務員の身分も得ているちゆうぞ。つまり、国のために勉強しながら給与までもらっているんだ」

「それもいいだろうが、先が決まりすぎて息が詰まりはせんか。Q大は職業訓練校じゃないぞ」

「それでもQ大は、建前では一応高度な人材育成機関やろ。法的な分け方があることは分かる。でも高度な人材育成機関であればこそ、何故にこちらが身銭を切らねばならんのかとね。同じことは、法学部の連中がよく言いよるで」

「そいつは考えなかつたな」

「もつとも、俺も督促状がくるまでは考えもせんかつたのさ。ところが、期日を限って、退学だの除籍だのと書いてやがる。マジ頭にきたね。Q大ごときがね」

柿沢という男は酔いで頭を右に左に揺らしながら、その度に女の胸を揉んだり、太股を撫でたりする。女もかなり飲んでいなのだと見え、めくられたスカートの裾を元に戻そうともせず、女の方から男の首に唇を寄せたりする。

高田の目と柿沢の目が合ったのかどうか。

「あんたら、学内のどこかで見たな。学部はどこや」

柿沢が高田に聞いた。年齢からいえば、柿沢たちQ大生も、達也たちも殆ど同年の筈である。

「俺は見覚えがないな」

「いや、あるぞ。いつも見る。その恰好には覚えがある。」

せや、食堂で毎日な。そんなカッターシャツ着てるんやから、学生やないやろ」

高田は笑ったままだったが、達也は柿沢の顔を昼間見たばかりだったので、「学生でなくて悪かつたな」と返した。

「そうか。でも、年の頃は変わらんやろ」

「想像にまかせるよ」

「ひよつとしたら、職員やないか」

柿沢も、達也の印象に思い当たる節があつたとみえ、目を凝らして眺め始めた。

「当たり前やな。だつたら、高卒やんか。高卒で働いてるんか。どこの高校や。聞く前に俺はな、長崎の西校や。Q大は第二志望やから、面白うも何ともない」

有名進学校である。達也の頭に小さなスイッチが入った。「俺も長崎だ。北島高校だ」

「ほう、人が殆ど住んでいないあの離れ島か。えらい田舎やんか。じゃ、大学入るもんなどおらんやろ。経済の奴が行ったことある言うてたで。キャンプにな。高校があるんか、ほう、あんなところにも」

仲間の一人が「俺も行つたよ。栈橋を降りたところから、真上にどこかい体育館が見える。校舎が白塗りの、確か三階建てだった。石を投げると、反対側の海の方に落ちてしまうんじゃないかと思う島だつたけどよ」と笑った。

「北島高校か。Q大には聞かんな。商業か工業が専門の高

校やろ。行くとしても、短大か私立のF大あたりやな」

達也の頭に、本格的なスイッチが入った。目の前の出刃包丁を握つたのはそのときである。

高田と加藤が、達也の前に回り込んだ。

「もういいだろ。相手は酔っ払いだ。これ以上手荒なことをすると、俺たちの方が面倒だ」

「言いたい奴には言わせとけばいいだろ、というのが達也のスタイルじゃないか。お前の腕力の凄さは、俺たちがよく知っている。関わるほどの相手かい」

達也も心得ている。柿沢を殴って怪我でも負わせる方が、自分には心配である。なにしろ、高校時代は柔道やラグビーの猛者と組み合つて、二人を病院に送り込んだのだった。しかし、「外に出ろ」と言つた手前、自分から先に降りる訳にはいかない。

祥子は、こういう場に何度か居合わせたらしい。加藤の彼女にしてはもつたないほど、取り乱すことがない。

「あなたたち、早く彼氏を介抱してあげた方がよくはない。信号を折れるとすぐ左に、時間外でも診てくれる外科があるわよ。達也も、ボクシングのアマチュアチャンピオンだから、素手で殴るのもこれ以上はいけないことよ」

落ち着いた声で、柿沢を取り巻く中のリーダーらしい男に向かい言った。

「ふざけんなよ。お前ら職員なんだろ。俺たちを守るのが一番の仕事なんじゃねえのか」

柿沢が両脇を抱えられたまま、叫んだ。
「Q大の学生なら、それらしくした方が将来のためになるんじゃないかな。少なくとも、世間はそう見てるよ」

高田が総務畑らしい、場を収めるときの柔らかい物腰で言う、なおも藻掻こうとする柿沢を抱えた連中は、入口から渋々出て行った。

居酒屋の店員にも、どうやらQ大のアルバイト学生たちが多いらしく、「今の経済の連中には癖の悪いのがいましてね」と、高田に向かい照れくさそうに頭を下げた。

「俺がボクシングのチャンピオンって、あれは何だ」
達也が祥子に聞く。

「ああでもないと言わないとすんなり出て行かないでしょ。でも、達也の腕力は折り紙付きだというから、大きく外れていることもないでしょう」

「そんな力ないよ。ただでさえ座り仕事ばかりで、体がなまってるから」

「達也の馬鹿力は、結構あちこちで威力を発揮している。棚に載せた書類棚が重すぎて下ろせないときとか、公用車が車庫脇の溝に嵌まり込んだときとか」

高田が合いの手を入れる。

ろう。そんな横柄な奴が、よく大学院に残ったり、社会の支配層になるらしいな。俺も考えは達也に近いけどな」

「近い、という程度か」

「まあ、現実志向の甘ちゃんにありがちなことだろう」

高田は八百年の歴史を生きた末裔だとかで、職場の部長だの課長だのにひれ伏す風潮には馴染めないらしいが、強いて抗いもしない。

「家柄や出自がまかり通るというのも嫌らしいが、学歴オンリーという方も考えものだ」

達也は、十八歳時の境遇や尺度で、以後のことが仕分けられていくという仕組みがどうにも腑に落ちない。

達也はジョッキに残っていたビールを飲み干し、「加藤の誕生日が台無しだな」と隣を見る。

「加藤の二十一歳は、四人の中で一番遅い九月だ。祥子より二月も遅い。しかし、F大の学年は一番上だ。来年は最終学年なんだよな」

高田が口を出す。達也と高田は二年生、加藤は三年生である。加藤は高校卒業と同時に就職し、すぐにF大に入ったので口スがない。達也と高田は二人とも大学受験に失敗し、一浪後も失敗して、就職した。

「俺なんぞ、最初から就職組だし、昼間の大学なんて考えたこともない。親父がいなかったからな。母に仕送りをす

「ああ、困ったときの使い走りには向いてる。ところで俺何で包丁握ったか分かるか」

「田舎者と言われたからか、F大のことを悪し様に言われたからかな。あるいは、その両方か」

高田も宮崎の秘境と言われる椎葉出身であり、達也の北島に引けを取らない。何でも、平家の落人の子孫だという鷹揚な性格で、根が明るく出来ているらしい。

「当たらずとも遠からず、かな。一番力チンときたのは、第二志望で、というところさ。自分の不本意なところを別の形に変えて拗ねている、と見たのさ。昼間の督促状のこともそうだが、ひねくれた理屈を考え出しては、税金でまかなわれているという場所にネジ込んでくる」

「どこにも、その手があるよな」

「税金が使われていると言えば、どんな苦情でも通り、手が怯むと考える単細胞だ。そんな奴が、いったい何人の本気で勉強したい連中を蹴落とし、ただペーパーの点数が少々よかったからというだけの理由で、渋々第二志望に入ってしまったなんぞとほざく。挙げ句、勉強をやっていったらという横着なことまで言う」

「達也のプライドが許さない、という訳か」

「田舎者だ、アホだという方もある。しかし一番は、Q大に第二志望で入ってやった、という言いぐさだ」

「まあ、奴はとことん甘やかされ、ひねくられて育ったんだ

るつもりだったが、何とかなると言うもんで、その金をF大に注いでいるというだけの単純なことさ」

加藤は会計の仕事をしている。祥子とは最初から同じ課の同僚で、この半年間一緒に住んでいる。

「母はまだ定年には間があるけれど、早く孫の顔が見たいんだとさ」

加藤の話は、達也や高田とは違い、いつも地に足が着いている。着いているというより、現実には生きている。生まれたのも市内であり、Q大に一時間もあれば通えるところだというから、今も生活圏から離れていないということだ。

「いつ籍に入れるんだ。もう出来るんだろう、祥子」

「彼が学生の間は、待つつもりです。お母さんも了解だし、卒業後早い時期に、ということだわね」

祥子は加藤の横顔に言う。祥子の落ち着きぶりは、どこからくるのだろうか。職場でも堅実に仕事をこなし、辺りには既に姉さん女房の風格を漂わせている。

「アパートは、お母さんも一緒に住める世帯用なんです」

「知ってるさ、これまで何度当てられたか知らないな。達也と一緒に行く度に、上手い飯が出るのは嬉しいが、俺たちまで世帯じみてくるのはどうかなあ、ということさ。お陰で加藤を誘うのは遠慮しちまう」

「構わないんですよ。ちゃんと普通に誘ってやってくださいいな。でないと、一人だけ老け込んでしまっでしょ」

祥子も市内の生まれで、商業高校を出て、すぐに就職している。就職のためには商業高校の方が適しているのだろう、パソコンも資料作りもお手ものだし、大学出の女性が専門学校やカルチャーセンターに通ったり、合コンに頻繁に出たりするのは見向きもせず、仕事の残りを遅くまで丹念にこなすのだという。

祥子は整った顔立ちには違いないのに、目立つことのみならず、あまりない地味な印象を受けるのだが、それでいて女性特有の体型の方は十分過ぎるほど発達しており、若い男の同僚よりも、世帯を持った上司の話によく上るのだという。

「加藤の誕生会、今回は外でするんじゃないかな」

高田がこの会を企画したくせに、今更それはないだろうというものだ。

「とんだ飛び入りがあつて、加藤より、達也の方が目立つことになつちまつたしな」

「同じ歳だなんて思えませんか。Q大の学生たち、今が一番面白くて、華やかなときなんですね」

「祥子といると、俺たちまで十歳以上老け込んでいくみたいだ。職員をやっていると、柿沢なんかガキに見えてしまうから不思議だ」

「高校で情報技術の基礎をちゃんと学び、料理も科目に組み込まれ、入学時のガイダンスでは子作りの仕組みまで教えてもらえるんだろう」

「適齢期ね。ちょうど今頃かな。あまり早過ぎるのもどうかと思うけど、三十半ばだと弱ってくるらしいのよ。精子と合体する中身が。勿論、精子の方にも違いがあるのよ」

「精子と合体ときたか。すげえリアルな話だな」

高田が、首を祥子の胸の間に寄せた。

「バカねえ、何のために牡と雌の役割があるのだと思う。こんな大切なことをいい加減にしてるから、ちゃんとした子供が生まれないのよ。人間の根源に関わることよ」

「そういう年齢的なこと、祥子は昔から考えてた訳なの。十八で就職し、二十二で生むなんてこと」

「まさか、考えないわよ。でも、本能的にはどこかで期待してたのかな」

「本能的にはか。本能が加藤を選んだって訳なんだ。とすると二人とも、本当におめでとうだな」

高田が茶化すと、「俺も子供は多い方がいいんだ。五人はほしい」と返すもので、「どうも二人とも、御馳走さんお開きだ、お開きだ。お前たち早く帰っちゃまえ。いい子が出来るぞ。こんなときは」と居酒屋を出ることになった。

達也は一人になると、柿沢のことが思い出され、パンチを繰り出した指が火照り始めるのを覚えた。高田や加藤たちがいなくなったら、柿沢の胸ぐらを掴んで引つ張り出し、四、五発は殴っていたかもしれないと思った。「てめえの

「仕組みなんて大袈裟な、そんなことまではないですよ。商業高校は女子が多いので、入学の一番に産婦人科の女医さんが女子の心得という話はしてくれたわね。でも、周りのみんなは知っていることばかりだと、退屈してたわ」

「祥子はどうなんだ」

「聞いたことはあるけれど、それ以上はないわよ」

少し顔を赤らめてはみせたが、「でもね、よく考えたら大切なことなのよ。女体にも適齢期というものがあるのだと思うのよ。あら、達也なんか妙な想像してるでしょう。顔に出ている」

ようやく柿沢のことが頭の隅を離れかけた見え、達也の目尻に笑みが戻った。

「俺がか、女たちとはサークルでよく飲みに行ったりするけど、何も無いよ」

「何も無いの」

「文芸サークルだからさ、女の方が多いんだよ。だから、余計にお互いの目が光っているんだよな」

祥子は悪戯っぽく笑いながら、「気が多過ぎるのか、欲張りすぎるのかのどちらかでしょう」と言う。「それともいかにも豊富な経験がありそうなので、相手が引いてしまいうのかも無いな」とも言う。

「俺の話にすり替えないで、その適齢期とかの方を説明してほしいな」

ひねくれた思いを他のせいにして、拗ねてやがるのだ」と口に出して腹の底から叫んだものだから、通りがかりの男が何か因縁でもつけられたのかという驚いた表情で、達也を横目にし、路地に走り込んだ。

達也には、柿沢のひねくれた考えがいく分かは分かる。「第二志望のくせに」という言いぐさもよく分かる。

達也には、最初私立F大の夜間部という目標などなかった。Q大に二年続けて落ち、自棄半分に就職したときに、F大は初めて目の前に現れたのだった。柿沢の言う第二志望なんてものではない。屈辱でしかないと思つたものだ。

しかし、入ってみると夜間部は思いの外明るい場所、女学生も結構多かった。サークルの文芸同好会には、大学の半分の女が集まつたのではないかと思えるぐらいに、華やかな匂いを纏った連中が集まつていた。

里佳、紗理奈、美由紀などはアイドル系だし、有紀と佳菜はQ大受験組でもあった。紗理奈や佳菜は家も裕福だと聞き、決して苦学生というイメージはなかった。また、一般的に、通ってくる子の勤務先の大方は、大手という名称で括られる企業や官庁なのであった。

「うるさい親の指図に従うより、自分でやりたいものを掴むんだ」彼女たちの意見の大半はこうだった。

達也も彼女たちとは普通に接しているのがあつたが、特に有紀とは作品を通じて親しみを抱いており、教室の屋上

のベンチで話し込んだり、好きな作家の本の貸し借りをしていた。サークルが終わった後、みんなと離れて二人で喫茶店に寄ったりはしたが、有紀の郊外電車の終電の時間を越えることはなかった。

「第二志望でもないしなあ」

達也は、有紀と別れてアパートに戻るときもそう考えた、「真剣に選んで決めた仕事でもないから」と、Q大という職場に入ったことがまだ落ち着かないのだった。達也にとつて、Q大は学生として籍を置くべき場所の筈だった。仕方がないことだとは思いつながら、窓口に並んで立つ学生たちを、羨望の思いで見、いつの間にか気持ちが浮いてくるのを、今に至っても上手く手懐け得ないでいる。

いまさら、大学がどうのこうのと拘っている場合ではないのであるが、Q大の職員になったということが、自分でも後に悔いを残す選択だったという気持を消せずにいる。同時にF大に入ったことも、ことを決定的にし、かえって自嘲気味になる元を作った。

「どの官庁にでも、入ることが出来たのだった。しかし、面接の連絡が来たのはQ大からだけだった」

ここには、浪人前の三か月の間就いていた北島の役場職員の身分を捨て、家を飛び出してきた場所であるから、文句を言う筋ではない。そう言い聞かせる。

柿沢のひねくれねばならない事情も、自分とたいして違

わないのだろう。と考えても、十分に納得した訳ではない。「俺には第一志望も、第二志望もなかった。もともと志望というものなどなかったのだ」

というのが当たっている、という思いに落ち着いたのはQ大の裏通りの墓地に沿って歩いているときだった。北島では子供に将来の夢など与えない。高校に通っても、大学進学希望や就きたい職業への憧れなど持たせてくれない。どういふ形であれ、島に残るのが全てなのである。

柿沢の仲間の一人が言っていたとおり、石を投げれば向こうの岸を越え、落ちてしまふような考えしか持ち得ない。これは地形のことを言うのではなく、島の住民たちが、子供たちに託そうとするものがこの域を出ないということだ。役場、農協、漁協、百姓、漁師、大工、理容師、美容師、教員という職があれば足りてきた島であるから、それ以外に職が必要だとも考えない。島を出た連中が、盆暮れに都会の匂いを抱えて帰島しても、彼らがまつとうな職にあるのかないのかの区別もつかないし、つける必要がない。

であるから、もともと第一志望も第二志望もなく、目の前の職に就き、見慣れた相手と早く一緒にになり、皆がするとおりに子を三、四人儲け、次の世代を育て、年を経て朽ちた者を順送りに見送る。というのが百年、二百年と続いてきた島の習いであり、常とすることなのである。

だから、後継と見込んだ者が、少しでも常識を越えて動

こうとでもすると、島の考えの埒外にあることになり、理解を得ないどころか、卒の内に引き戻そうと家を挙げ、島を挙げて実力を行使する。余計なことなどするな。余計なことを考えるな。いらぬ知恵を付けるんじゃないんだと。

そのためには、まず世間のことを知らしめない、上級の学校に出さない、関心を島内のことに向けさせる、早いうちから異性をあてがう、といったことが島の表通りを大手を振って歩くのだった。

後継予定者ではない者であるなら、話の種にもならないで済むのかもしれないが、後継に当て込んだ子が高校の成績上位にでも付けたらすると、島の至る所の目が光り出し、後ろに後ろに引き戻そうという声が唸り始めるのである。

達也は、Q大以上を目指そうというところでもないらしい目標を掲げたばかりに、島ではめつたに現れることのない変人とされ、理屈の分からない阿呆と蔑まれてきたのだった。というより、島の秩序を乱そうとする外道呼ばわりをされながら、親や親族と激しく睨み合うことになった。

思いが乱れるままに、行きつけの飯屋に寄った。加藤の誕生祝いが思いの外早くはねたため、飲む方も食う方も中途半端なままだった。

「早いね、今日は」

ビア樽に近いほどに太った女将さんが、くわえ煙草をく

ゆらしながら言う。「えらく湿っぽいんだねえ、どうしたんだい」底抜けに明るい女将さんは、常連客のちよつとした変化も見逃さない。

「はあ、振られやがったか」と言いながら、定食の皿が出て来る。メニューは女将さんの方で日ごとに決めるのだ。鱈の塩焼きである。大盛りに飯をつごうとしているので、中でいいから、と頼む。

「飯の前の、ジョッキはいいのかい」
「では、一杯だけ」

出て来るジョッキが大きい。それも、縁から零れ落ちそうなほどに泡が盛り上がっている。

「学校は休みかい」普段は看板近くに寄るのだが、二時間は早い。この時間は、Q大の学生たちが多く入るらしい。「うちの学校は行っても行かなくても、たいして変わる訳でもないけど。今日は先約を入れていたから」

「なら、そつちの方でやらかしたんだな」
女将さんの嗅覚は鋭い。伊達にこの商売をやっていないという、勘が働く。そうなんだろう、と目が細くなる。

「しけた飲み方をするね。相当痛めつけられたんだな」
あまりに間近に見られるので、せつかく脂の乗った鱈の塩焼きがうまく喉を通らない。「彼女だろう、相手は」と煙を吹きかけられるので、噎せてしまった。

「まあ、そんなところでず」

「気が弱いなだねえ。ごたごた言わずに、引つ攫えばいいんだよ。待つてるんだ、本当のところ、女は」
後は豪快な笑いになり、新しく入って来たQ大生らしい客の方に向かった。

教室から、飛び降りた者がいるという連絡が入った。電話を受けたのは達也で、最初相手が何を言っているのか理解出来なかった。聞き取れなかったというべきか。

若い女性が、「今、目の前に人が降って来て、血が噴き出して、目玉が、目玉が」と言うのである。場所はと聞くと、二号館だということらしい。学生であるのか、職員であるのか、通行人がまぎれ込んだのかも分からないが、人が落ちたということには違いないらしいので、走り出た。学生担当の方にも連絡が入ったらしく、二号館の方に担当が走っている。「えらいこっちゃぞ」彼は、青ざめている。事故だとなると、その怪我の程度や、対処の流れを思い描いただけで気が遠くなる。

「経済の二号館じゃないぞ」

「向こうの方だ」

「となると、農学部じゃないか」

遠巻きに人が群れている。赤色灯を点けた救急車や警察の車が、スピーカーでがなりたてる。経済ではなかった、という安堵の気持ちが一瞬支配したものの、農学部の二号

館らしい建物を取り巻いている群があり、駆け付ける学生や実験着の職員たちが急ぐ。

「下がりなさい、下がりなさい」というマイクの音量の中心から、担架に乗せられようとする人物の足が見える。素足であるから、男か女か確認出来ない。

救急車は担ぎ込まれた人物を乗せ、すぐに出発体勢に入った。「通り道を開けなさい」という警察車両のマイクが怒声を数度発し、救急車と一台の警察車両は急発進し、大学の通用門に向け走り去った。

墜落現場と見える五階建ての建物の玄関付近には、黒い血溜まりが出来、警察の担当者が写真撮影をしたり、メジャーで計測したりしている。

「驚いたのはこちらです。三階で実験をしていたら、窓の外を影が過ぎったのです。何気なく窓に目をやった途端でしたから、ひどくゆつくりと布きれが落ちてきたのかと、思っただんです。ところが、直後に鈍い落下音がして、走り下りるところなんです」

警察の係員に、教授らしい白衣の男が興奮した口調を並べる。「上から降ってきました。目の前に落ちたんです。何か音がしたのですが、覚えていません」女子学生とおぼしき二人が、唇を戦慄かせ教授の後に続く。一人はしゃがんだ恰好になり、腰が立たないらしい。

初秋の日射しの中、黒い血の塊から湯気が上がり、周囲

に肉片と思えるものが飛び、潰れた女性ものらしいズックが一方は植え込みの傍まで飛び、一方は現場から三メートルほどという辺りに転がっている。

「どきなさい、どいてどいて」

最も年長らしい警察官が、取り囲んだ群衆を遠ざけようと声を荒げる。「見世物じゃない。邪魔になるから。ずつと下がって下がって」と人だかりを割らせ、さらに応援部隊が到着すると、鑑識らしい腕章を付けた係が、肉片をピンセットで挟んだり、血溜まりに屈み、作業に入った。

「大学人じゃないのかな」

「屋上に、五十年配のパジャマの人が朝からずっとしゃがんでるので、変だなと三度見に行っただわ」

「お昼休みの弁当を食べる間もずっと、海の方を眺め、座っていた」

「顔を合わせた訳じゃないから、どんな人かって聞かれても分からない。注意を向けていたんでもないし」

「パジャマの色はピンク。小さな花柄だったかな」

人垣の中の話は、たいていが同じ内容だった。

達也は、こういう光景に出会うのは初めてではなかった。大学という空間は、入学を許可された者を迎える場所ではあるが、ピクニック客や、酔客や、およそ考えられ得るたいていの人影を飲み込んだ。昼間、正門のロータリーに裸

の女が寝転んでみたり、夜になると、空き巣が忍び込んだり、建物の影の芝でアベックが重なったり、木陰を簡易トイレに使用する者や、宿替わりにする連中もいた。

枝ぶりのいい松の木が幾本もあり、放射線使用のための立ち入り禁止の場所があり、二十四時間機械音の止まない部屋があつて、キャンパスの電気が消える時間はなかった。担当していた学生寮から女子学生が転落死したり、正門

近くの植え込みで高校生が縊れたりした。担当の学生寮のときは、警察の調査や聴取に付き合ひ、親元に連絡し、親との対面に応じ、泣かれ、退寮の処理をし、経過の概要を作成し、本部に報告した。女子学生の日頃の生活を聞き調べ、通院歴などを調べ、シヨックの癒えないままの親と病院に出向いた。親が、日頃から通院加療をしているのを知っており、携帯の送信歴から事件性が無いと認めてくれたので、より以上の痛みを抱え込まなくて済んだが、一人一人の命を預かることの重さを知ったものだった。

勿論、詳細な報告は事後に膨大な資料を作成し、提出することになるのであるが。

今回の農学部二号館の墜死のことは、農学部の担当者に委ねられるので、経済学部の達也は胸を撫でたが、目に焼き付けた現場の血溜まりや、離れて飛んだ靴の像は簡単に消えてくれそうもなかった。

現場を去りながら、何故か柿沢のことを考えていた。電

話を受けたとき、一瞬「柿沢が転落した」という思いが頭を過ぎったため、かなりパニックになっていた。

もしそうだとしたら、あの顔面に当てたパンチの衝撃が彼の脳髓を刺激したのかもしれないと、一人思い悩んだのだ。そうではなかったことに安堵したものの、あれから柿沢はどうしたろうと考えた。

外科病院の夜間外来に向いた筈の柿沢は、傷の手当てだけで終わったのだろうか。入院という羽目に陥ってはいないだろうか。一緒の女はどうしただろう。

包丁を構えたときに、怯えて見開かれた柿沢の目の色ははつきり覚えているのに、女の顔を覚えていない。女の悲鳴は耳の隅に残っているのだが、髪の奥に隠れた女の顔が、どういふ表情で柿沢を抱えて行ったのか知らない。

二週間近くになるのに、柿沢も仲間たちらしい誰もが、学生担当係の窓口に現れた形跡がない。学生担当係も、長期欠席者の話などしない。授業料の納期限は三日前に過ぎてしまったので、何かのオチをみたのだろうか。

聞くと、「あれね、まだ入金になっていない。納期限までに未納だからといって、即除籍だのにはすぐにはならない」のだと係員は説明してくれたのだが、どうしてそうなるのかまでは彼もよく理解していないらしい。「だから、舐められてしまう」とも言うし、柿沢が言うとおりに将来ある芽をこれだけの理由で摘み取るには、さらに上層部まで

案件が回らねばならないのだということらしい。

「それって、通常のやり方なの」

「病気療養中であるので、説明にはすぐには出向けない。動けるようになるまで当分待つてくれ、という連絡を受け、その旨を上部には報告はしているが、現段階では動きが止まっている」のだと言う。相手が相手だからな、と係員は指示待ち状態にあるらしい。

Q大はかつては過激派に席卷され、学長室まで占拠され外部に本部を置いたりしたことがあったという教訓が未だに残っていて、学生の身分の異動にあつては教授会での審議が必要であり、その結果を学長が追認するのだというから、慎重である。

F大になると、ことは簡単である。息急き切つて納入期限内に金を準備して窓口に持参しても、締切が十八時までという定めがなされていたとすると、一分遅れても「受付不能、即除籍」という処分が窓口担当者から言い渡される。達也は定期の購入のための証明を得るため窓口に並んでいたら、窓口の後ろに並んだ者の順番が来て授業料を差し出しても、時計を睨んだ係員が「タイムアウト」を宣言し、金を差し出した男はその場で泣き崩れたのだった。

「今日まででしょう。この人の話を聞いていたら、授業料を工面して走り込んだと言つてるでしょう。どうしてそん

な措置になるんです。事情があつてのことでしょう」

F大の事務職員はやおら立ち上がった。

「今日の十八時までという決まりだ。説明の余地はない」

「十八時までとはどこで決まつてるんですか。学生の引ききにも書かれてないことですが」

「彼には掲示板でそう伝えている。慣例でもある」

「一分でしょう。一分で裁かれて仕舞うのですか。彼は、現に十分前には事務室に来てたでしょう。この混み具合で遅くなつたんですか」

係員は「本学のルールだ。ルールを守れない者は、うちの学生ではない。単純明快だ」体育会系上がりだと見える耳の潰れた屈強な体格の男は、自説を曲げようとはしないばかりか、遅れた学生の肩を持つ言い方をする達也にまで殺気じみた目を向ける。こういうときの達也の目も相手を正面に見据えているのだが、立場が異なるし、やり取りを聞いていた事務室の三人が指を鳴らしながら近付いてきた。「この根本原理が分からない者は、本学には不要だ。お前もその口なのか」と誰何する。「こいつには、一度は温情をかけてやった。しかし、二度目は駄目だ。問答無用だ」と四人が言い張り、遅れた学生も「申し訳ありません」という次第になつたので、達也も引かざるを得なかつた。

割り切れない思いのまま、文芸同好会の部屋を覗いた。一限目の会計論など、興味もなかつたからだ。狭い部屋に、

女が三人、男が二人いた。

「学校辞めたんじゃなかつたの。珍しいつたら」

紗理奈が頓狂な声を出した。有紀の背中も見える。

「みんな一限目はどうした、出ないの」

「やだあ、掲示板見てないのね。会計論は先週に続いて休講。里佳と美由紀の一年生たちは、合コンですって」

責任者の川口もいて、「今度の『とをある』の編集企画を考えているところだ。達也、今度少し長いのを書かないか。五、六枚どうだ」と七、三に分けた髪を撫でる。

「五、六枚か。内容は何だ」

「ああ、少し絞つたテーマでな、今出ている案では『夢と現実』『独楽』『落下』なんてとこだ。このあたりで一つに決め、十人ぐらいが書く、という案だ。残りは自由スペースだけだな」

「俺だつたら、『落下』というあたりが響くな。五、六枚か、いいんじゃないの」

「そうか。『落下』の賛同者が多いんだな。ならば、テーマは、だいたい決まりだ。改めて連絡はするけど、進めておいてくれないか。締切は来月末としたい」

達也の頭に、農学部二号館の墜死事故があつたからという訳ではないが、自分の今の心情を綴るとなると、落下ということばが最も相応しいと思えてならない。

「掌編作品集と銘打つのか。見開き二ページだな、OK

だよ。第三号ともなれば、趣向を凝らす必要ありだな」
「創刊号はよかつたんだが、二号はゴミ籠にやたら捨てられたのが目に付いたんで、事務室から呼び出しを喰らってさ。事務の連中は、ちゃんと読みもしないのに、こんな体たらくでは補助金カッターだぞ、ときた。一号に五千円の補助金に過ぎないんだけどな。補助金がカッターになると、公認のサークルとは認められない。つまり、このサークル室からも追い出されるといふ訳だ」

「事務の連中、空手に柔道に剣道に相撲のサークル出だ。彼らのサークルには、年間三十万円はいくのと違うか」

「昼間の方だと、特別育成費だか何だか知らないが、そんな半端なものじゃないよ。全日本クラスに名を連ねるのだからな。何にしても、体育会系と文化系サークルの差ははかり知れんよ。文化系サークルだと、国立のQ大や私立のS大の活動に、まるで歯が立たないんだしな」

「F大の文化系サークル軽視、というのは根強いからな」
「まあ、茶道、華道、書道あたりまでだ。うちらは、公認といつてもその他扱いなんですね。同好会に認知してもらおうのも先輩から引き継いで、五年かかった訳だし」

有紀が「ここはここでしか出来ない表現をしていくという、まずはそこからじゃないかしら。大学の体質がどうのといがみ合つてもすぐ変わる話ではないわよ」と言う。

「事務室の言いなりになるつもりはないのよ。二号は惰性

で出した、という安易さがあつた。主義も主張も問わないから、文芸同好会の発信する中身をもう少し意識して、文芸作品にまで高める努力ね、ここだと思つて。何も新聞部がよくやる太鼓持ちの姿勢に倣う必要もなく、世評に阿るといつつもりもなくね」

副責任者の紗理奈が、ノートをボールペンの先で叩く。様子から察すると、第三号の編集企画というより、第二号の反省会ということらしく、何度か議論を積み上げてきたらしい。

「文芸誌として、詩、小説、エッセイは、勿論有りとしてだ、我々の内から発する文学論だとか、評論方面に決定的に欠けている。考えて見れば、主要作家の作品の読みこなし、読書体験から自然と滲み出る高質の作品へのチャレンジ、これが弱いよな。これらが一時に生まれてくるとも考えられないので、まず文学とは何かに重心を移すため、定期的な読書会を持つ必要を感じる。達也の考えはどうだ」
達也は、この手の読書の蓄積という話が苦手である。なにしろ、北島での日々は、本を読むということは怠け者の証拠であり、空想に耽ることなど、唾棄すべきことであり、いらぬ知恵を付けるな、いらぬことをするな、という荒々しい空気の中で育ってきた。

文学全集の中ででてる作家の作品や、外国文学の名だたるドストエフスキーだのゲーテだのシェークスピアだの
川口は「今度は、気合いを入れてやれそうだし、基本的な流れを掴むという方向にも向かうというのが気に入った」と市役所の総務課員らしい顔を綻ばせた。

二限目が終わると部室を閉め出されるので、一緒に出たのだが、川口と紗理奈は、行きつけの居酒屋に寄るからと正門で別れた。十時前五分だった。

達也は有紀と喫茶店に入った。大学に来たのは一か月ぶりになるから、ずい分空いたものである。

「第三号のテーマ『落ちる』は、タイムリーだな。誰の案だったの」

「佳菜だったかな。最初は『夢と現実』の方が優勢だったんだけど、夢も現実のいずれも『落ちる』という結果からしか書き出せない、と言い出したのね。私も同じ気持だったから、支持したのだけれど」

「俺も含めると、三人がQ大を落ちたという経験ありだからかな。そういうことだろうか」

「そうかもしれないし、佳菜の場合は最近職場の先輩に振られたらしく、可愛そうなくらいに塞ぎ込んでいた。しばらく姿を見せない間に、墮胎したんだとか。それも加えると、彼女の方は『墜ちる』の方の意味合いも含まれているんじゃないかしら」

「落ちるに墜ちるか、寒くなってくるな。有紀の方は他に

の本にさえ、真剣に触れたことがない。

「少なくとも、文学全集の一人一人の作家と作品を、まず理解する必要があると思う」

川口の意見は、もつともであつた。「書くことは大切だが、プールを満たすことなしに、如雨露で水を撒くということでは、サークルの先が見えておられると思わないか」

「里佳と美由紀の作品は感性が研ぎ澄まされていて、一作二作には不自由しないだろうけど、彼女たちも自分のプールの深めておくに越したことはないわ」

紗理奈はかなりの読書量があるというだけあつて、川口の意見をサポートするに十分だった。

「俺は気に入った作家の作品だけでいいのかと思つたけど、サークルがその方向を打ち出してくれるのは有り難いな」
達也は賛同した。有紀も「体系的に読みこなしていくということは、すごくいいと思う」と言った。

「基本路線は読み、そして書く、ということに置くとして、第三号の当面のテーマは『落下』あるいは『落ちる』ということをやってみようか」

「私たちにとつて、切実な体験でもある『落ちる』。これはいくらでも書けそうな気がするわ」佳菜も賛成した。

「いつまでも『落ちる』に好かれてばかりいるのは嫌だけど、まずここを洗い直した上で、『舞う』『進む』とでもいきたいわ」有紀が、総括したかたちの意見を出した。

何かあるの」

「Q大は確かに落ちたわ。でも、実力が伴わなかっただけそれより、この二十年ほどと言われるらしいけど、ずい分世の中が不穏になってきたわ。いつも決まってやって来ていた台風など、極端に荒っぽくなったんじゃないかしら。地震、詐欺、それに得体の知れない殺人、テロ、止まない戦闘。私たちも、身近な隣人たちも、気短で、怒りっぽく、なって。週刊誌の見過ぎだと笑われるかも知れないけど、人間の運氣というか地位が落ちているんじゃないかしら」

「なるほどねえ。僕らには希望の持ちようがないというかそこら中に見えない棘だらけの編み目があつて、行く手を阻まれているという夢に魘され、よく目が覚めるな」

「この時代を肌で感じたとき、果たして哲学や文学全集が何かを示してくれるのかどうか分からないけど、私たちが刹那的に生き過ぎているんじゃないか、とは思えるのよ」

「文学の基本も、科学の基本も、それらの何たるかも分からないままではいけないが、文芸サークルに属する限りでは、まず基本中の基本の部分を、少なくとも心得として持っていないかと思えるんだ。日々の流れが荒く、どうかすると、日々の流れがふいに止まってしまふんじゃないかという不安の方が先に来てしまふ」

「私、女として言わせてもらえば、自分自身さえ上手に制御出来ないほどに不安な今、この世に自分の子供を送り出

すということが、怖くてたまらないの。どう思う」

「俺も怖いな。人間という存在自体への不信を強く感じる人を生み出すということが、巡り巡って、どこかで人殺しの片棒を担ぐ。そういうふう利用されることがなきにも非ずだ、ということかな。と同じく、人間のしでかすことが荒々しくて理解出来ない、というか怖いんだ」

有紀はコアに舌を焼いたと言いながら、「台風、地震、火山などの自然現象の荒々しさも怖いけど、人の心の中が覗けない。何か得体の知れないものが隠されていそう」と首を疎めた。有紀の家は母がクリスチャンだということであるが、いつも綺麗事ばかり並べられ、有紀は足を踏み出せないまま、と言う。

「職場にいるとね、心を病む人が何と多いことかと思うんだ。つい一週間前までプロジェクトの先頭に立っていた人が、ふいに立ち上がれないと言いつつ、それで病気休暇、休職ときて、三年を費やし、退職となる」

「これも週刊誌的な話かもしれないけれど、結婚して、この人の子供を是非生みたい、とどうすれば思えてくるのかしら。もつとも、結婚しなくてという話も加えなければならぬけれど。何かこう、女の自分が粗雑になった感もあるし、男の人の性的能力が奪われているとも言われるわ。そんな統計には興味ないけど、それって、膨れ上がり過ぎた人口を減らしたいという自然の意思の働きのかな」

達也は、有紀の話の意図が計り兼ねた。いつも郊外電車の終電までには話を終え、別れることにしている。

今、有紀は達也に次の決心を迫っているのかもしれないし、そうでないとも言える。自分自身の胸に聞いてみても、体の方に聞いてみても、それ以上でも以下でもない。

「話は変わるけど、三日前に農学部で飛び降りがあった。細かいことは聞かされていないけど、五十年配の女性で『疲れた』という一言だけの発信メールが携帯に残されていたんだという。農学部の職員で、休職が癒え、二週間後には復職する予定だったらしい。何でだ、と誰もが思ったらしい。有能な人で、息子は農学部の教員で、孫もいるんだ。どう考えればいいのか」

「それこそ、落ちちゃったのよ。気持も体も」

「気持が落ちたから、降りたくなつたという訳だ。なるほど、有紀の直感は当たっているのかもしれない」

気にしていた問題が、あつてなく片付いたと感じた。

達也と有紀は喫茶店を出て、いつものとおりに有紀を郊外電車の乗り場の階段下まで送り、別れた。

文学部の総務係の高田と、昼の学食で一緒になった。

「加藤の奴、入籍を急いでるという。祥子の腹の子、もう中絶には間に合わないらしい。適齢での合体を果たしたんだ。二十一歳でだから、祥子には上首尾という訳だ」

「加藤の二十一歳の誕生日。やはり完了形だったという訳だ。俺たち、担がれたつてことになるのか」

「いいだろうさ。奴らは実に現実を肯定してるよ。達也もひねくれてばかりいないで、少しは何とかしたらどうだ」

「俺は早過ぎる。今は、全くその気がない。いや、そんな気になどなれない。高田こそだ。椎葉の名門の血を守らねばならんんじゃないか」

「名門の血か。そう言われるといささか責任を感じざるを得んが、俺もまるでそんな気になれない」

「サークルの奴が言つてたんだが、我々の時代、男の能力が減らされているとかいうことだが」

「自然の摂理として、男を役立たずにする事で、人口の爆発を抑ええるという、マスコミの好みそうな都市伝説とやらではないのかい。科学的に使えそうなデータをああだ、こうだ、これでもかと並べてな」

「マスコミの煽り立てる世紀末現象とやらは、周到で緻密で強力だからな。実際山も海も動かすし、月だつて都合よく人間に使われるのかもしれない」

「まあ、人間もこの星に間借りをさせてもらっているのだから、ほどほどにしとかなとな。本当に自然の摂理が黙っちゃいけないだろうよ。最近、かなり胡座をかき過ぎているらしいが見え隠れしている感ありだな」

向かいの席を見ると、柿沢と女を囲んで五、六人が、達

也と高田を睨んでいる。達也が高田の袖を突いてやると、「入って来たときから分かつてるよ」と動じない。

「柿沢の鼻面は、どうやら治ったみたいだ。あのときは横向きにひしゃげていたのだった」

柿沢の席から、柿沢と男二人が近付いて来た。

高田がゆつくりと椅子を回転させた。

「いつぞやは失敬、職員さんでしたか。それもボクシングのチャンプさんでしたな。お陰さんで、二週間入院、一週間自宅加療で、このとおり元の美形に戻りましたよ。その間に、納入期限到来。督促の、また督促が来て、払わねば除籍、だそうです。それで、こんな頭悪い職員を囲うQ大にはすつかり愛想つかしましてね。わざわざ登校して、退学届とやらを投げ付けて来た、という訳です、ハイ。学生担当の末端管理職のオッサン、喜ぶまいことか。涙流しそうに頭下げるんです。ま、この顛末は、どうでもよろしい。そこでどうするかと言うと、こんなトコには一日とて居たくない。気持はお分かりでしょう。いや、高卒には分からないか。自分は、首都圏の難関私大の編入学試験に臨み、景気を付けた上で、もう一度第一志望の入試に臨みますよ。せつかく懇意になれた職員さんには悪いが、そんな馬鹿面見たくもないんでね、こちらから離れてやりますわ。という訳。何か質問あるなら今のうちですよ。誤解のないよう

もう一度言いますが、キャリアアップのため、当方の都合で離れてやるんです。ゆめゆめ、チャンプの前から逃れたなんぞと錯誤するな。万が一そうだと、すぐにこの連中の耳に入りますからお忘れなく。それに、学生街の飲み屋には、職員さんらが迷い込む資格はないんでね。次もまた同じ場面に出食わしたら、痛い目に逢いますぜ」

柿沢は小刻みに震わせる拳に、果物ナイフを握っている。「よく分かったよ。あんたも、落ちたことには違いないんだ。いや、これはこっちの台詞だが。淋しくなるな。ときどき、向こう気の強い奴の鼻面を見てると小突きたくなるんだ。第一志望とやらは、せいぜい頑張ってみなよ。向こうが機嫌良く門を開いてくれることを、俺も祈ってるよ」

達也が言葉を返すと、汗みどろになった柿沢の頬が一瞬歪み、急ぎ足で皆を引き連れ食堂から出て行った。

有紀から何度かメールが入ったが、返事を書かないまま。何でも、近々「人口爆発と自然災害」と題する高名な科学者の講演会があるのだという。メールの内容は、自分たちの問題として考えるよい機会ではないか、というもの。達也も以前、世界では人口爆発というのに、我々の社会は少子高齢化という歪な構成になっており、自分たち若者が高齢者を本当に支え得るのだろうかという話をしたことがあった。どうしてこんな変なことになったの

か。多分、先進国と称する国では目先の利潤を追求し、競争が激しくなったために、高い学歴や高度な技術や資格を得るという目標を設定し、自分の子供に競争を駆け抜ける

に必要なベストな環境を作ろうと考えた結果が、子はいずれ一人か二人しか持てないという社会の流れとなり、子もより高いものを得ようという競争になった。気が付いたときには親世代の人口構成に比べ極端に子世代が少ないという現象に至ったのだ。

その子の世代に当たる我々は、常に能力を試され、容赦のない序列を付けられてきた。もつとも、北島や椎葉という過疎地などのごとく、二百年もそれ以上も変わらず眠り続けているという地がなくはないが、この過疎地には容赦なく貧困と無知という波が寄せつつある。

北島の連中の生き方も、この競争の中でかろうじて生き延びる、という手なのかもしれないという気がしないでもない。嵐が過ぎ去るのをひたすら待つ、という方法で。

何であれ、我々世代に求められることは、これから多くの高齢者の医療を支え、食を住を支えつつ、自分の生活を築いていかねばならない。

そのためには、Q大という関門に「落ちた」ということが切っ掛けでどう彷徨い行くことになるのか、どう不利益を被るのか。まだにわかには理解できそうにない輪の中にあって、輪の締め付けがどう厳しくなりゆくものか、身を

もって知らされることになるのであろう。

それにしても、地震が頻発し、火山も活発だ。降る雨の量も親世代の経験を越えたものであるらしく、台風の強力さ、発生数も統計の枠をはみ出しているというから、心穏やかではない。世界を見渡せば、民族、核、テロという二ユースが流されない日はない。これらの二ユースに流され過ぎていけないが、無視を決め込む訳にもいかない。

「せつかくの機会だけれど、今回は会議日程が複雑で時間ごとれそうにないんだ。またということにさせてもらえないだろうか。大学にも二週間ばかり顔を出せそうにないんだ。申し訳ない」

結局達也がメールの返信をしたのは二日が過ぎ、内容はひどく冷たいものになってしまった。案の定、有紀からは返事は戻ってこなかった。

直後の教授会で、柿沢の退学が議案となり、意見なく承認された。学長にまでも申すとき意気込んでいた柿沢にして、資料の中の退学者三人の一人として、レールの上を滑り、易々と流れ落ちて行った。

二号館から墜落の職員の件は、農学部の問題であるからかもしれないが、教員以外の職種の者の委細は、資料にも記録にも止められないままである。

教授会では、特に功績が顕著であったとして二名の教授

が基幹教授という名称を与えられ、基幹教授の給与が特別給与として遇されることになり、時間の割き、続いて教員定員の削減問題が審議された。大なる者はより大に、小なる者はより小に、という最近の原則が適用されることに過ぎないのであるが、パイが減らされて行く中で、容赦のない奪い合い、と言ったら分かり易い話である。

学部長からは、「文系学部、大学院の将来展望について」という、最近文系改編論が出されていることに対する地区の学部長会議での議論内容について、かなり詳細に亘る報告がなされた。

街は初冬の趣を醸し始めている。港湾に近いキャンパスには、時折激しく風の舞う日がある。

学生街の居酒屋の座敷に、入籍した加藤と祥子を囲んで、高田、達也といういつもの顔が揃った。

「全然目立たないじゃん。辛くないの」

達也が聞く。祥子は「何大騒ぎしてるの。毎日残業の日々ですからね」と笑う。

「まだ八か月目だからね。産前の六週間前とは言わず、直前まで出勤すると本人は言ってるよ」

「五人生むためには、二年に一人。仕事もちゃんとやつてのことよ。甘ったれてはいけないわ、特に私の場合ね」祥子は会計の数字を扱うのと少しも変わらない、という

滑らかな口調のままである。

「子供は生きてるんだぞ。そんなに気楽に行くのかい」
「御心配ありがとう。だけど今からああだ、こうだと心配ばかりしてちゃ、始まらないわ。もつとも、意気込みでしかないけれど。職場に迷惑を掛けるときには、思いっきり掛ける。でないときは、職場優先よ」

「加藤の協力が必要になるよな。お前の方が子育てに向きそうだし。主夫の役を買って出てはどうだ」

「努力するよ、最大限。本来の仕事も増えそうなんだが」

「高田には一年間、東京研修の話があったな」
「そのときは、F大は休学だな。若しくは、東京の夜間に編入学という手もある」

「じゃあ、東京は一年以上か」

「東京には国立大学はいくつもあるし、勤め口の方もいずれ転任という方法もあるからと、説明を受けたよ」

「そうかあ。結構、皆したたかにやってるんだ」

達也は、加藤にしろ高田にしろ、落ちていない者も、一度、二度落ちた者も現実に足を付けているんだと、改めて三人を見返した。

「達也さん、知っているかしら。あの柿沢という人、編入学試験受かったっていうわ。今日、大学の本部に連絡が入ったらしいの。私の方、授業料の関係があったので、ついでに知らせがあったのよ。難関私大のW大だとか」

「本当かい。あいつそんな力、持っていたのか。これを景気付けに、第一志望を受けると言ってたんだっただな」

柿沢には同じ仁義を切られた高田も、初耳らしかった。

「あいつの振れ加減、尋常ではなかったからなあ。仁義に恥じないよう、やるじゃないか」と驚きを隠せない様子だ。

一杯目のビールのジョッキが空になり注文すると、祥子までがコップの二杯目に口を付けた。

「こんなとき、飲んでていいのか。お腹の子の方は」

「本当に久しぶりに飲んだのよ。こちらの方は少し口を付けて、後は旦那に回すから」

「入籍祝いだからな。八か月の新婦か。色香が過ぎるぜ。落ちるも落ちないも、上ろうともしてないんだからな。」

高田は四月から東京か。さすが平家の末裔だよ。スケールが違うんだ。これから新しい学問を志すつてのもいいな」

「それぞれだよ。皆が同じことばかりしていたんじゃ、世の中が回らないよ。いろいろあつて人間、つていうところじやないのか」

「達也は特別変化はないのか」

「ないよなあ。俺だけ置いてけぼりかよ」

「腕っ節はやたら強いのに、文芸サークルなんぞに入つて女の渦の中にあるなど、かなりアンバランスだよ。とにかく、三人の中では詩文などには最も遠いという印象だ」

高田は三か月前の、包丁事件を思い出しているらしい。「外からの印象だけでは心の中は読めないさ。何もセンチメンタルな風貌が、文芸に繋がるとは限らないんだがな」「しかし、あれだけ啖呵を切れるというところからして、我々常人には真似出来ないな。啖呵といえ、まだ上があったのだった。さすがにあれば、怖じ気付いたな」

高田の言うのは、一年ほど前、この店の近くを少しよけるほどの足で歩き、青信号をゆっくり歩いていたのであった。信号で左折しようとする黒塗りの大型車が、「早うどかんかい」という怒声とともにクラクションを立て続けに鳴らした。少し先を渡っていたのが高田で、巻き舌の怒声に背中が震えたという。

達也は、歩みを変えなかつた。遅くも、早くもならない。車から黒シャツが飛び出して来た。続いて女が一人。

「ふざけるんじゃないか。聞こえねえのか」

男が達也の前に立ち塞がった。達也は歩調を早めようとせず、そのまま男を歩道まで後退らせ、男の顔も見ずに路地に向きを変え歩いたのだった。後ろから「おい、にいちやん、えらい度胸してるじゃねえか」と叫んで、殴り掛かってきたのをすると交わり、男の両手首を掴むと軽く振り上げたのだった。男は車を急いで降りてきたためか、ポケットには切れ物を忍ばせていないらしく、達也が振り上げた手を動かさない。達也の胸に殺意が芽生えた。

「生意気するんじゃねえ。てめえ、舐めやがって」
と言ったとき、膝頭で男の急所を軽く蹴上げてやったのだ。両手の動きを封じられたまま、崩れかけた男。

「待って、止めてよ。サブ、ここじゃ負ける」

女の濃化粧の匂いが被さってきたと思ったら、男の手を力まかせに掴み、達也の手から奪い取ると、大股で逃げ出した。高田を、達也の助っ人だと見たらしい。

驚いたのは達也の方だった。男たちは交差点の真ん中に止めていた車に走り込むやいなや、ドアを締めるのもそこそこに、急発進させたのだ。

「俺たちも逃げた方がいいぞ。すぐに仲間が来る」

高田が叫んだので、達也も我に返ると、全速力で路地に逃げ込んだ。達也の鼓動は高鳴っていた。

「A組の奴らだ。縄張りだぜこは。無茶するな達也」

高田の顔は青ざめていた。高田も、達也も、完全に酔いが醒めてしまっていた。

有紀にメールを送った。

「先日は失敬。学校はちゃんと行っていますか。原稿を書かねばならないのでした。『落下』でしたよね。何故か放哉の匂ばかりを眺めています。彼も落ちたのですね。彼さえも落ちた。『底がぬけた柄杓で水を吞まうとした』」

後に何かを加えないことには意味をなさないことは分か

っていたが、後の文字は消した。多分返事が来ないだろうことも分かった。

高田や加藤たちと別れると、飯屋の女将のところに寄った。すぐにブリの照り焼き定食が出て来た。頼みもしないのに、ジョッキが出て来た。

「今日は幽鬼の真似かい。ちようどいい。昨晚、その踏切に若い女が飛び込んでな。一時間も開かずの間よ。やるんでも、飛び込みは止めな。飯が食えなくなっちゃうよ。お陰で、こっちまで胸が悪くなつてな。こっつてき、見通しいいんだよ。線路を遮るものではなくて、一キ口は見通せるな。何でも、Q大の女学生だという話だ。悩みもないらしく、テニスサークルでプレーをした帰りだという」

女将は立て続けに煙草の煙を吐く。そうでもしていないと、震えが止まらないとも言いたげだ。頼みもしないのに二杯目のジョッキが出て、女将自身もジョッキを抱えている。「地震がどうの、津波がどうの、大雨がどうのというのは怖いけれど、人の頭が妙な作動を起こすのって、怖いもんだね。人間六十五年やつてるけど、海も山も水も怖い。だけど、人間が一番怖い。最近そう思うんだよ。この店も、若い学生さんたちと喋るのが楽しかったんだけど、こう簡単に人間が壊れるのをテレビで見、新聞で見、間近に肉片まで見た日にや、たまらないね」

大笑いしているときの女将しか知らないのだが、結構繊

細な作りの人であるのかもしれないと考える。

「女将さん、昔から一人ですか」

「旦那は二人とも死んだが、子供が一人ずついた。ところが、皆A組にやられちゃった。旦那の方もだげどさ」

後は、例の高笑いになる。ああ、と合点のいく気がする。店を出て、線路を跨ぐ。何の変哲もない線路だ。この辺りは事故の名所だと聞く。笑って別れた相手が、線路に足を掛けたまま、その場に吸い寄せられた恰好で電車に轢かれるのだという。信じられない話だ。

達也は易々と線路を渡り終えると、夕闇が下りたQ大構内に入った。夕闇が下りたという表現は適切ではなく、水銀灯は明るく要所を照らし、理系の建物から電気の消える日はない。ロータリーを通り越し、記念館の前を真っ直ぐに歩くと、正面は農学部になる。二号館は正面から少しだけ横手に入った場所にある。

何で二号館に向かうのだ、と港湾からの風に吹かれながら呟いた。行ってみたくなくなったから行く。何も自分を駆り立てるものもなく、遮るものもない。手も足も意のままに動いているし、ビールで酔ってなんかいい。

落下という、テーマのことを考えていたことは確かである。しかし、落下の現場を見なければ書けないほどのものでもない。五、六枚、見開きにして二ページの中身である。F大の文芸同好会のために、仁義立てをするつもりもない。

二号館の玄関に立つと、明るい照明の中、職員や学生たちが多く行き交う。「後少して、見通しがつくわ」「先にアパートに帰ってるから」と、二人が笑顔を交わす。

階段を上りきると、屋上である。屋上に出るには特別の施錠もなく、出ると三つの丸テーブルがあり、椅子があり、傍らには小さな実験室が設けられている。半屋上と言うべき場所なのか。ドアからは学生たちが頻繁に出入りする。

九月の転落事件の痕跡があるとすれば、比較的新しい字で「フェンス近くには、教室事務室の許可なく立ち入らないこと。下りるときは内階段を利用すること」という表示がなされ、手前にワイヤが張られていることぐらいである。達也は北側のフェンス近くに寄ってみた。上つてきた玄関の照明が眩しい。しばらく佇んでみたが、何ごともない正面に港湾の灯りが見える。ふう、と息を吸い、吐いた。

特別な感興は湧いてこない。ダイビングすることも、留まることも、夕闇の中では自由なのだと思った。

今一步、フェンスに近付いてみた。港湾からの風を感じ、闇の空気を大きく吸って、吐いた。多分、港湾の向こうの辺りが北島の筈だ。それが何だ、と思う。やはり自分は、かなりの外道であるらしい。

息を整え、五度目に吐いたとき、カバンのポケットに放り込んだ携帯が鳴り始めた。

(了)